

ニラ



栽培管理されたニラ



ニラの花

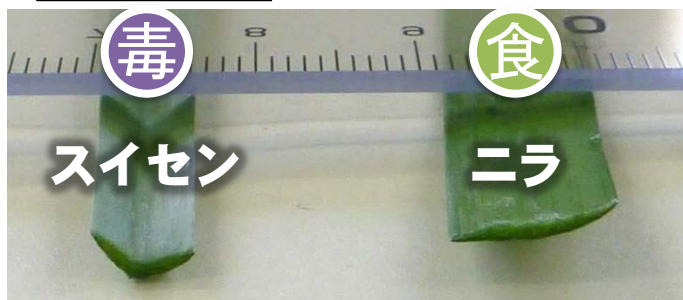


ニラの種子

写真提供: 国立科学博物館
筑波実験植物園

- 日本では古くから栽培されており、河川敷等に野生種も存在。
- 旬は春で、現在流通するもののほとんどは、葉の幅が広く、肉厚の大葉種。これに加えて、夏には小ぶりで暑さに強い在来種の小葉種も出回る。
- 夏には葉の間から30-40 cmほどの花茎を伸ばし、白い小さな花を半球形につける。実が熟すと割れて黒色の種子が落ちる。
- 多年草で、刈り取った後の株から再び新葉が伸びるので、年数回の収穫が可能。
- 葉はニラ独特の強い臭い。

- 葉の中央部から先端にかけて厚さが薄くなり、中央部から先端の断面は扁平。(下図参照)



- 蕾・花を摘むか、種子をこぼれ落ちる前に採取し、野生化したニラが園芸植物等と混じるのを防ぐ。



家庭菜園でニラ(左奥)が野生化して、スイセン(右手前、有毒)と混じてしまった例

【間違いやすい有毒植物】

スイセン、スノーflake(スズランスイセン)、キツネノカミソリ、ゼフィランサス(タマスダレ)など

ニラと間違えやすい有毒植物

スイセン類

- 多くの園芸種があり、全国で観賞植物として栽培。日本の暖地の海岸線近くには、野生化したニホンズイセンが群生。
- 品種、環境によるが、冬から春にかけて白や黄色の花を咲かせ、背丈は15-50 cm程度。
- 茎は黒又は茶色の外皮に包まれた鱗茎の内部。葉は、若干厚みがあり、中央部がへこみ、断面はV字型。
- 猛毒のアルカロイドやシュウ酸カルシウムを含む。



↑ 園芸種のラッパスイセン ↑ スイセンとニラの比較

スノーフレーク(和名:スズランスイセン)

- 春咲きの観賞植物で、花がスズラン、葉がスイセンに似る。背丈は30-50 cm程度。白い花びらの先端に緑色の斑点。
- スイセン類と同様のアルカロイドを含む。



スノーフレークの花
写真提供: 国立科学博物館筑波実験植物園

キツネノカミソリ

- 本州以南の野山に自生し、春に鱗茎から30-40 cmの帯状の葉をつけるが夏には枯れ、その後30-50 cmの花茎を伸ばし、秋に黄赤色の花をつける。
- スイセン類と同様のアルカロイドを含む。



キツネノカミソリの花

ゼフィランサス(和名:タマスダレ)

- 夏咲きの観賞植物で、春から秋に鱗茎から20-30 cmの帯状の葉を伸ばす。夏頃に花茎を伸ばし、品種により白、桃色、黄色等の花を上向きにつける。
- スイセン類と同様のアルカロイドを含む。



ゼフィランサスの葉と花
写真提供: 国立科学博物館筑波実験植物園

見分け方の主なポイント

- ニラの葉には特有の臭いがあるが、スイセン等の葉にはニラ臭はない。
- ニラの葉の先端は薄く断面は扁平であるが、スイセンの葉は先端まで厚みがあり、断面は中央部がへこんだV字型である。
- それぞれ異なる花をつけるので、開花期に栽植場所、自生箇所を確認する。(農地、菜園では野菜類と園芸植物は明確に区分、識別しておくこと。)